

手塚治虫、藤子不二雄ら輩出「漫画少年」70周年

創刊者 加藤の足跡に光

地元弘前で来月企画展



加藤 謙一
(提供・加藤文庫)

弘前市出身で、講談社で雑誌「少年倶楽部」の編集を手掛けたことなどで知られる加藤謙一(1896～1975年)が、手塚治虫ら多くの漫画家を輩出した「漫画少年」を創刊して20日で70周年となる。来年1月からは弘前市立郷土文学館で企画展が始まり、その業績に改めて光が当てられる。弘前の小学校教員時代に抱いた、子どもたちへの思いを原点に、戦前戦後の日本中の子どもたちを夢中にさせた名編集者の足跡は、時の流れを経ても今なお輝きを放っている。(外崎英明)



加藤が編集に携わった「少年倶楽部」や「漫画少年」。戦前戦後の子どもたちに熱く支持された(弘大付属図書館加藤謙一文庫蔵)

加藤は旧制弘前中学校(現弘前高校)、県師範学校(現弘前大学教育学部)卒。弘前市富田尋常小学校教員の時、学級誌「なかよし」を手作りし子どもたちに喜ばれたことをきっかけに雑誌の編集を志して上京し、1921(大正10)年に講談社に入社。同郷弘前出身の作家佐藤紅緑の少年小説「あゝ玉杯に花うけて」などを掲載した「少年倶楽部」を、発行部数2万8千部から最大75万部超の大雑誌に育て上げた。

漫画文化発信の契機に

東京・豊島区「トキワ荘」復元へ

東京・豊島区では現在、加藤謙一が見いだした手塚治虫ら漫画家たちが暮らし、伝説的なアパート「トキワ荘」の復元を軸に、地域活性化を図るプロジェクトを進めている。2018年工事に着手し、東京オリピック・パラリンピックが開かれる2020年の完成を目指す。弘前市出身の加藤謙一が育んだとも言える漫画・アニメ文化が、より広く発信される契機となりそう。

トキワ荘は同区椎名町5丁目(現南長崎3丁目)にあったが1982(昭和57)年に老朽化により解体された。同区では、地元住民を中心とした組織「しま南長崎トキワ荘協働プロジェクト協議会」が区とともにトキワ荘の漫画文化を生か

い。富田尋常小学校時代に抱いた思いを、加藤は生涯、度あるごとに口にしていた。「加藤謙一文庫」がある弘

大付図書館の前には、この言葉を刻んだ「なかよし」の碑が建立されている。来年1月からは弘前市立郷土文学館で開かれる企画展では、漫画少年などの雑誌や加藤の愛用品、書簡、遺墨など約70点を展示する。同文学館の権引洋一企画研究専門官は「加藤の魅力は、開拓者としての情熱と、教

育者としての視点。次代を担う子どもたちのため、おもしろくするために、質の高いものをつくらうと情熱を傾け続けた生涯を紹介したい」と意欲を見せている。加藤の四男で、「漫画少年」物語 編集者・加藤謙一伝(都市出版)の著書がある、21あおり産業総合支援センター前理事長で国立公文書館館長の加藤丈夫さん(79)「東京都は『日本の漫画やアニメは今、世界に広がりを見せているが、そのふるさとが弘前だった』というのを、多くの人たちが知ってくればうれしい」と話している。

同協議会を中心に活動する時計店主の小出幹雄さん(59)は「地域の文化継承のため、地域が主役となって活動している。加藤謙一やトキワ荘を通して、お膝元の弘前市と豊島区の関係者が、草の根で連携できる可能性もあるのでは」と話している。(外崎英明)

12月20日には自ら起こした学童社から漫画少年を創刊。中央ではまだ無名だった手塚治虫を見いだして「ジャングル大帝」を連載するなど子どもたちの心をつかみ、投稿のコーナーからは藤子不二雄、石ノ森章太郎、赤塚不二夫らそうそうたる漫画家が生まれた。「子どもは国の宝だ 子どもたちを明るく健やかに育てる仕事に 身を捧げた

トキワ荘は同区椎名町5丁目(現南長崎3丁目)にあったが1982(昭和57)年に老朽化により解体された。同区では、地元住民を中心とした組織「しま南長崎トキワ荘協働プロジェクト協議会」が区とともにトキワ荘の漫画文化を生か

※この記事は東奥日報社提供です。
この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。
転載ならびにこのページへのリンクは固くお断りします。
[問い合わせ先]
弘前大学附属図書館 jm3162@hirosaki-u.ac.jp